

地球科学輻合ゼミナール

(2008年度 後期 第8回)のご案内

「黒潮続流海域における 大気海洋相互作用の観測」

根田昌典

(理学研究科 地球物理学教室)

太平洋や大西洋における西岸境界流の役割として、「低緯度域から中緯度域に膨大な熱を運んで地球の気候を調節する」という説明をされることがある。日本人に身近な黒潮とその下流の黒潮続流を例にとれば、なるほど従来から冬季に膨大な海面熱放出があるといわれてきた。ところが、それ以上の詳しい知見はあいまいであった。例えば放出された熱エネルギーはどういう過程でどのくらい放出されているのか、冬だけが大事なのか、ここで起こっていることは大気と海洋の相互作用なのか、一方向作用なのか、という質問に対する答えはほとんど示されていない。その主な理由は、季節変動に対してさえ観測的な事実を把握するのが困難な海域であることと、統計解析を行うと中緯度大気の数年スケール以上の変動にはエルニーニョ状のシグナルが支配的に見えてしまうことが挙げられる。最近になって、この海域の大気と海洋の物理パラメーターの変動に熱帯と独立した成分が見られることが示されてきており、そういう点からようやくその変動の実態把握とその役割を評価する必要性を指摘する声が上がってきた。米国CLIVAR (Climate Variability and Predictability) プロジェクトにおいても西岸境界流域大気海洋相互作用に関するパネルが設けられるなど中緯度気候や大気海洋相互作用の研究者などの目が向き始めたところである。本講では、現場観測や衛星観測によって得た黒潮続流海域における海面熱フラックス変動の特徴やその解析の困難な点や問題点の紹介も交えて、黒潮続流海域の大気海洋相互作用研究の現状についてお話しする。

11月26日(水)午後4:30～午後6:00

場所：理学研究科6号館 201号室